

アドルフォ・サルコリの音楽活動に関する研究(8) —1936年に書かれたサルコリ関連資料を中心に(その2) 追悼する人びと—

A study of Adolfo Sarcoli's Music Activities(8)
—Focusing on Documents Relating to Sarcoli in 1936, Part2. People in Mourning—

直江学美 (人間科学部こども学科教授)
Manami NAOE (Faculty of Human Sciences, Department of Child Study, Professor)

〈要旨〉

明治44(1911)年に来日したアドルフォ・サルコリ(Adolfo Sarcoli;1867-1936)は、1936(昭和11)年3月12日夜、東京の慶應病院で69歳で死去した。本研究では死去後の1936年4月以降に書かれた報道記事、弟子たちの追悼・トリビュートに関する資料を中心に調査した。資料の調査によって、サルコリは死去後も新聞や雑誌に取り上げられていたこと、そして掲載先が『婦人画報』や『少女の友』など、音楽愛好者以外の読者層を持つ雑誌にも広がっていたことを示し、サルコリが死去後も当時の日本国民の関心を集めていたことを明らかにした。弟子たちも盛大かつ大曲ぞろいの演奏会を開催することでサルコリを追悼し、音楽雑誌には多くの追悼文が寄せられ、美術界からもサルコリの功績を遺そうとするものもいた。

一方、サルコリを冷ややかにみていた当日の日本音楽界の様子も伝わり、サルコリに対する評価が交錯していたことが浮かび上がった。

〈キーワード〉

アドルフォ・サルコリ, 西洋音楽受容, イタリアオペラ

はじめに

アドルフォ・サルコリ(1867-1936)は、1936(昭和11)年3月12日夜、東京の慶應病院で死去した。享年69歳であった。

『金沢星稜大学人間科学研究第13巻第2号』⁽¹⁾(直江学美2020;33-38)で述べたように、サルコリの入院から、死去、葬儀に至るまで、大きく報道され、日本で音楽活動を行った25年の間に、多くの弟子や理解者を得ていたことがわかった。こうしたサルコリ追悼はその後も続く。

本稿では死去後の1936年4月以降に書かれた報道記事、弟子たちの追悼・トリビュートに関する資料を中心に調査した結果を報告し、若干の考察を加えたい。

なお、()は筆者の補筆を示す。

1 追悼する人びと

1-1 三浦環

サルコリの遺品の中から切り抜きの状態で見つかったため、掲載紙および掲載年月は不明であるが、1936年に書か

れたと思われる新聞記事がある。三浦環(1884-1946)のインタビューを記事にしたもので「『お蝶夫人』の生みの親 サ氏の危篤を聞いて駆けつける 三浦環夫人は自動車中にて語る」の見出しがつけられている⁽²⁾(三浦環1936)。

「サルコリイ氏の来朝されたのは四十三年頃でせうか。(…)(帝国劇場の山本久三郎専務が)丁度来朝になったサルコリイ氏が立派な聲楽家だといふので直ぐ御迎ひになって、帝劇で何かやることになりました。サ氏も私の声を聞いて『貴女ならサントツアが出来る』と仰って、伊太利から持つて御いでになったカバレリアの本を下さつて、直ぐ御稽古を始めて、一ト月で仕上げて翌月出しました。これがサ氏につき合つて戴いた始めでした。その頃は今から三十年近く昔の事で、サ氏も立派な聲でアクトも巧かつたので、私のサントツアの振もサ氏がつけて下さつた。何しろ見た事もないシシリイ女をやるのですが、私も気合のある方ですし、サ氏の振付の御影で相當なサントツアが出ました。私が伊太利語の『お蝶夫人』の本を始めて貰つたものその頃でした思へばサルコリイさんが環のお蝶夫人の

生みの親のわけで御座います。しかしその頃は本を戴いただけで上演したのは後です。初演は倫敦でした。それは一九一四年アルバートホールで女王王其他二萬餘の群衆の前で、ヘンリイウツト卿指揮の下に私がリゴレットオのカロノメを歌ひました所が、それが大變評判がよかつたので『御蝶夫人』を出すことになつたのです。この時私がトランクの中から取り出したのがサ氏から戴いて其後荷物の中に入れ方々を持ち歩いた伊語の本でした。私はこれを毎日十頁ずつ暗記して、一ト月か、つて三百枚のこの歌劇を覚え込んだわけです。(…)環が『御蝶夫人』で皆様から御定評を戴くにつけても、サルコリーさんは忘れ難い思い出深い先生なのです。(…)私一人だけでも随分御恩になつてゐます。廣く日本の歌手で先生の御世話になつた人はどんな數に上るでせう。先生が日本の歌手を育て、下さつた事は、大勢なものだと思ひます。そして一生の過半をこの異國のために盡し、こゝで暮し、こゝで死んで行かれる先生に對して日本も立派な國である以上、何とかして御報ひしなければなりませんわ。本當にこれは皆様の御力が借りたいと思ひます」

三浦環が「お蝶夫人」として世界の舞台で活躍したきっかけがサルコリーであったこと、サルコリーに対する謝意にとどまらず、日本でサルコリーにお世話になつた多くの人もサルコリーの恩に報わなければならないと思いを述べている。

この他、三浦環が関係する記事に「サ翁 追悼音樂會に前奏不協和音 兩歌姫が出演中止⁽³⁾」(『読売新聞』1936.4.1, 2面)、「追悼音樂會のもつれ解消⁽⁴⁾」(『読売新聞』1936.4.8, 7面)がある。

「わが聲樂界の父サルコリー翁の追悼音樂會をめぐつて翁の最大の愛弟子三浦環、原信子の兩女史が確執を起して原女史はベルトラメリ能子女史と共に出演を拒絶した例の『いさかひ』は廿九日の音樂會を前に和解がなつた。問題は音樂會一切を三浦女史が切り盛りし原女史に何の相談もなかつたことにあつたので三浦女史は一切をシエナ會主催として身を退いたので原女史も出演を快諾した⁽⁴⁾」

この諍いも、元をたどれば三浦環、原信子、ベルトラメリ能子という当時の日本を代表する歌手たちの、恩師サルコリーに対する思いの強さによるものであろう。

1-2 原信子

三浦環と「いさかい」を起こしたもう一人の弟子、原信子(1893-1979)も『明朗』5月号に「サルコリー先生を憶ふ」というタイトルで追悼文を書いている。サルコリーの弟子とされる原信子ではあるが、追悼の文章には「音樂學校時代から、六ヶ月程お習ひしただけで其の後は大抵外國生活⁽⁵⁾」だという(原信子 1936:103-104)。また、サルコリーの弟子であり長年サルコリーの身の回りの世話をしていた

長島(丸山)徳子の娘、丸山洋子によると「母から三浦環、関屋敏子、喜波貞子らの名前はよく聞いたが原信子の名前はあまり聞かなかつた」という⁽⁶⁾(丸山洋子 インタビュー 2020.6)。

『明朗』の追悼文の中には「シエナと言ふ古い、非常に藝術的な町の、床屋に生まれて聲がよかつたのでオペラシンガーになられたのださうです。私が九年程前伊太利で、學んでゐた、スカラの大立物、テノール・ベルティレを出した有名な歌の先生マンリオ・ババリョーニ先生が(私が學んでゐた時分はもう大變なお年寄で大分お腰も曲つてお稽古の最中居眠りばかりしてゐられて六年前に亡くなりました。)サルコリー先生の事を私に聞かせてくださいました。あれは音樂家ではなかつたが、自然ないゝ聲をしてゐた。まるでカルーソーの様だつた。ナポリの小さい劇場で、パリアツチがあるのに、夕方頃誰かがテノール・サルコリーが港からお晝頃汽船に乗つて日本に逃げてしまつたと言つて來たので、とても大騒ぎになつてしまつた」など、原信子がサルコリーに関してイタリアで聞いた噂話が書かれているのが興味深い。追悼文は「半生をベルカントの先生として、日本の樂界に盡されたアドロフ・サルコリー先生の靈に、深い感謝を永久に捧げます」と締めくくられて⁽⁵⁾(原信子 1936:102-104)。

『明朗』には「音樂學校時代から、六ヶ月程お習ひしただけ」と記した原であるが、後にサルコリーについても遺している。

「私は當時聲樂家になり度くて音樂學校に入學したのに、ピアノ科に入れられてしまつたので歌を學び度くてたまらずソツとサルコリー先生から、イタリア式な發聲を學ぶことにしました。(…)三浦環先生も、たまに歌いにいらしていたようですが、先生は音樂學校の教授迄なさつた方ですから、(サルコリー先生の)聲樂の弟子は私が最初でしょう。間もなく私は、バタフライヤトスカなどのアリアが歌えるようになりました。(…)サルコリー先生は實に日本へベルカントを植へつけた忘れることのできない恩人です。私はアメリカへ留學しましたが、少しも發聲には苦勞しないで其上勉強がつゞけられて幸せでした。直ぐニューヨークでバタフライのデヴユウして、世界で歌う事ができましたことは、サルコリー先生の最初のご指導が正しかつたおかげだつたと思ひます⁽⁷⁾」(原信子 1952:6-7)

原は『音樂世界』にも「逝けるサルコリー先生」と題して6ページにわたり追悼文を書いている。その中で原は、自分がサルコリーに師事するきっかけとなつた時のこと、そして最初にサルコリーを訪ねた時を次のように回想している。

「『イタリー人のテノールが、歌つて呉れるから、講堂に集まれ』と言はれて兼ねさん(柳夫人)と手をつないで入

つて行つてみました。太つた大きな髯も髪の毛も黒い人、あの時始めて黒い毛の西洋人があるものだと知りました。何を歌つたか今よく覚えてゐませんが、何でもリゴレットとフラディアボロを、少し手振をつけて歌つたと覚えて居ます。『あらカルーソのレコードそつくりね、あんな大きな人だから大きな聲が出るのねあんなに太い頸だから』等と、何しろみんな此の間シアリアピンが来た時より以上に驚いて仕舞ひました。殊に私達は聲樂部へ進級する試験の時、ナメクジを十匹ものんだのにピアノ科へやられて一生の望みもなくしよげてゐた時分なのですから、何も彼も聞き落とすまいと一生懸命でした。第一驚いた事には今まで獨唱と言えばキャラ、と聲を震はせて歌ふのだと思つてゐたのに、然も楽しさうにみんなの様に肩をすぼめたり手を握りしめたりもせず、自然らしい大きな震へない聲が樂に出て来るのに感心して仕舞ひました。そして暫くサルコリーと謂ふ名が上野の音楽學校のみんなの頭に刻み付けられてゐました。私は一人で、耳に残つてゐるだけのサ氏發聲法を眞似ていろいろの歌を自分で勉強してみました。(…)そして環先生の美しいお聲が其のまゝ大きく立派になつてゐたのに驚いて、自分も學校ではピアノをおさめて是非サルコリー先生について聲樂を勉強し様と決心したのでした。その時分から帝劇のオーケストラを指揮してゐてまだ時々學校へ來られてゐた竹内平吉さんに、サ先生の御住居を伺つて或る暑い日言葉が通じるか知らと、こわごわ尋ねてみました⁽⁸⁾ (原信子 1936)

1-3 伊庭孝

『音楽世界』の同号に、伊庭孝(1887-1937)が「サルコリー氏の功績に就いて」を書いている。

伊庭の文中に見られる「氏の素質と實力をもつて、さうした世間的な成功を求めるといふ事は無理な事であつて、あながち日本の文化機關や、日本の樂壇が、氏に對して不親切であつたといふ事はいひ得ないと思ふ」や「サルコリー氏が多くの勝れた聲樂家を門下から出したといふ事は、サルコリー氏の生涯で一番大きな仕事だつた。然し、サルコリー氏は、さうしたペダゴグとしての教養を持つた人でもなかつた様だし、それには随分不利な條件を澤山持つてゐた」、また「聲質の質感よりも、先づ聲量に驚いたのだが、さて、そのサルコリー氏を利用するだけに、日本の樂壇は進んでゐなかつたのである。ドイツ派が、彼を迫害したのも何でもなかつた」や「上野の學校が彼(サルコリー)に門を堅く鎖した上に、生徒が窃に習ひにゆく事も禁止した事などは時勢として止むを得ぬことで、學校としては當然な事をしてゐたのだと私は理解する」などの言葉からは、次の文章に見られる、サルコリーと東京音楽學校を「イタリア系」対「ドイツ系」という二項対立で捉えていた当時の見

解とは違った見方が伝わる。

「(関屋敏子は)上野の音楽學校へ入學し一方サルコリー氏に就て研究してゐたがそれが某外人教授の氣に入らず、ある時の前奏に敏子さんの獨唱に伴奏をしてゐたその外人教授が故意に曲を弾き違へたので憔悴して退校し爾來サルコリー氏の下に専心勉強して來たのであつた。⁽⁹⁾」(『読売新聞』1925年5月25日)

「伊太利音樂と獨乙音樂は丸で兩極端のやうなもので、ドイツ系の人にはイタリーを嫌惡してゐます。敏子さんが教授連や生徒間に白眼視されたと云ふのも眞實のやうな氣もします。かくして彼女は順路たる上野を退學なさいました。そして再びザルコニー(ママ)氏の指導を受けられました。⁽¹⁰⁾」(安芸太郎:1927.109-110)

続けて伊庭は、日本音楽界におけるサルコリーの功績を次のように評価している。「とにかく聲樂に關する迷蒙を取排ふといふ事には、實に二十幾年の年月がかゝつてゐる。其の爲めにサルコリー氏は恵まれなかつたが、其の間、日本在住のたつた一人のベルカント歌手及び教師として、殆ど黙々たる態度に近いもので今日まで押し通して來た氏の繼歴は、かつて花々しく奮闘したそれよりも千鈞の重みがある。サルコリー氏のシステムは完全無缺のものではないだらうが、然し氏一人の隱然たる存在が、今日どれだけの力となつてゐるかを思ふとき、私はすべての音樂家が、サルコリー氏の墓に、一枝の花を手向ける可きだと思ふのである。私は敢ていふ一さしたる活躍もせず、また報いられなかつたところに、彼の本當の功績があるのである。サルコリー氏は音樂の殉職者であつた」との言葉を續けている⁽¹¹⁾(伊庭孝 1936; 51-55)。

1-4 『音楽月報』の追悼特集

1936年5月1日発行の音楽雑誌『音楽月報』に追悼記事が複数掲載された。8頁から11頁までの4頁に渡る特集企画で、サルコリーが大正2年に発表した「論文」、および太田勤之、下位英一、井上けい子が書いた追悼文が載せられた。

サルコリーの「論文」は、サルコリーが大正2年に発表したとされる「日本と伊太利音樂」である。サルコリーはその中で、日本は全てが「北歐樂(ドイツ音樂)」に満たされているが、イタリアの音樂を取り入れるべきであると述べている。また「日本に於ける過去の洋樂普及政策は教育制度の形式に捕はれて音樂と民情の關聯に何等の考察を費されざりしことは大なる誤謬を招きたる所以である」と指摘している⁽¹²⁾(アドルフォ・サルコリー 1936)。

1-4-1 太田勤之

太田勤之は「私樂派の人サルコリー」と題した追悼文を「併し私が氏の最も大きな役割りとして茲に述べたいも

のは、氏が全く私楽の野に在つて、云い残されてはならない運動を起された人であると云ふことである。抑々當時の洋楽界は官楽派の對抗戦と云つてもその一つの観点を誤ることはないであらう。官楽派とは即ち上野の樂堂であり、獨逸樂の頑固な陣營であり、一聯の音樂學者と共に、その主たるものはウンケル教授であつた。これに對抗するものが私楽派であり、即ちイタリー樂であり、その最も意識ある人はサルコリー氏であつた」という強い言葉で結んでいる¹³（太田勤之 1936:8-9）。

1-4-2 下位英一

後に多くのイタリア語辞典を監修している下位英一の追悼文は「サルコリさんを偲ぶ」というタイトルで、こどもの頃にサルコリに会った時の様子やイタリアで再会した時の様子を、そして下位が日本に帰国してから再び交流が始まった時のことをなどを回想して紹介している。下位はその時々の様子や交流を通して感じたサルコリの人柄を会話文も交えながら生き生きと描写している。

危篤となる頃にはサルコリが「アツディヨ・シモキ!」（「さようなら・下位!」）と発したことも書かれており、最期まで傍にいた下位の文章からは臨場感も伝わる。下位の記した「サルコリさんは最期まで生徒の事が氣にかゝるのであらう。何んといふその暖かい心」や「私たちはサルコリさんが餘りに興奮するので、遂に去り難い心を残しながら病室を辞さねばならなかつた」などの描写からは、組織や威光に集うのではなく、「私楽派」らしく、人々が絆や縁でサルコリの元集っていたことが伝わる¹⁴（下位英一 1936:9）。

1-4-3 井上けい子

弟子の井上けい子は「サルコリー先生」というタイトルで、弟子から見たサルコリの姿やサルコリに対する感謝の言葉を多く並べた。「幾多の輝かしくも尊い置土産を此世に残して、我がアドルフォ・サルコリ先生は遂ひに天井へ歸つて行かれた。ベルカントの父、我國聲樂界の恩人とたゞえられた先生にふさわしく、その御最後は悲しくも又華やかなものであつた。異郷の空で、しかもわびしい病院のベッドで、とは云え、その枕邊は御蝶夫人の三浦環女史をはじめとして、先生の教えを受けた數多の有名無名の歌ひ手たちに美しく圍繞せられて、その痛心の眸に打守られつゝ、極めて安らかに眠るが如く息を引き取られたのだつた」との書き出しで「その日（1936年2月13日、サルコリ入院の二日前）既に頗る憂慮すべき容態であつたに關らず先生は誰が何と云つてもピアノの側をはなれ様とされなかつた。そしていつもよりももつと丁寧にもつと熱心に教へて下さつた。入院後も夢に現に口にされるのは御稽古のこと音樂會のことばかりだつたと聞く。全く勿體無い程好い先生であつた」や「約一ヶ月にわたる御入院中私共は殆ど

毎日の様に入れかはり立ちかはり病院を訪れた」などの文面は、弟子たちのサルコリに対する想いが伝わる。また「その功績は誠に淺からぬものがある。併しその間徹頭徹尾民間にあつて盡されたので報ひられるところは非常に薄かつた様である」との言葉は、太田勤之がサルコリの事を表した「私楽派」という言葉に通じる。

井上はサルコリの発声法にも次のように言及している。

「先生の發聲法は非常に自然で自由で誰もしらずしらずのうちに自分の聲が自分で思つていたよりももつともつと美しくなり得るものであることを發見することが出来る¹⁵」（井上けい子 1936:10-11）

1-4-4 『東京朝日新聞』「赤外線」

この他に、特集の一角に朝日新聞の記事が紹介されている。紹介されたのは1936年3月16日付『東京朝日新聞』「赤外線」に掲載された「サルコリ翁の死」である。記事は『東京朝日新聞』から転記されたこの記事は「第一は日本の聲樂界の大恩人たる翁の葬儀に、上野の音樂學校長をはじめ、私立のどの校長も會葬しなかつた事だ。それに放送局も怪しからぬ。翁は自身では放送しなかつたが、放送局は翁の門下生の御厄介になつてゐることはないか。就中一番怪しからぬのは東京音樂協會だ、樂會の社會的活躍を標榜して居りながら、數多い理事が一名も葬儀に参列していない¹⁶」とサルコリに対する日本の樂壇の姿勢に異論を唱えている。『月刊樂報』の「編集後記」にも同調するかのような次の一文が掲載された¹⁷（『音楽月報』1936）。

「なほ同氏の葬儀に樂壇人の出席者の少なかつた事をこゝに月報社は報告し、さゝやかながらも出来るだけの紙數を費やしてこゝに追悼欄を設け同氏の冥福を祈つて置く次第です」

サルコリの葬儀に「樂壇人の参列が少なかつた」ことはつまり、当時の日本音樂界の中心的役割を担っていた樂壇がサルコリの功績を認めず、敬意を払つてこなかつたということの意味する。この樂壇を取り巻く現状に対して、敢えて『音楽月報』がサルコリに対して紙面を使ったのである。

1-5 追悼謝恩演奏会

弟子同士の「いさかい」により開催が危ぶまれた追悼音樂会は、当初予定されていた4月29日から5月4日に変更されたものの、予定通りの出演者により日比谷公会堂で開かれた。

追悼音樂会に向けた練習の様子が5月1日付の『読売新聞¹⁸』と5月2日付の『時事写真新報¹⁹』に掲載された。「樂壇の父サルコリー翁の追悼音樂会がその愛弟子たちによってこの四日日比谷の公会堂で行はれる、これに先達つて全夜を飾る會員一同のアヴェ・マリアの合唱の総練習が

慶大音楽堂で行はれた哀悼銀色のヴェールを被りサルコリー翁の浮彫を捧げたるを囲んで幾度か歌唱され当日その儘の涙のアヴェ・マリアを演出した寫真練習当夜コーラスの右端三浦環さん二人目サ翁の彫像を持つ長島徳子さん⁹⁾ (『時事写真新報』1936.5.2)



(写真1)「涙のアヴェ・マリア」⁹⁾

「故ア・サルコリー先生謝恩大演奏会」は、5月4日午後六時に始まり、主催はシエナ会、後援は東京音楽協会、月刊楽譜、音楽新潮、音楽世界、音楽新聞であった。

会の冒頭には、「楽壇代表」として牛山充 (1884-1963) が、「門下生代表」として三浦環が追悼の言葉を述べ、会場は「満員劈頭」であったという¹⁰⁾。(『読売新聞』1936.5.5, 7面)

プログラムに掲載された内容を次に記す¹¹⁾ (プログラム「故ア・サルコリー先生謝恩大演奏会」1936)。

御挨拶

追悼の辞、楽壇代表、牛山充

同、門下生代表、三浦環

第一部

- 一、合唱「アヴェマリア」(グノー作)
伴奏 慶応義塾マンドリン倶楽部
指揮 服部正
- 二、歌劇「リゴレット」新しき御名 (ヴェルディ作)
服部都代子
- 三、歌劇「ラ・ボエーム」ムゼッタ (プッチーニ作)
鈴木万恵子
- 四、歌劇「トロヴァトーレ」平穏なる夜 (ヴェルディ作)
鈴木敏子
- 五、歌劇「カヴァレリア、ルスティカーナ」ママも知る通り (マスカーニ作) 神保悦子
- 六、歌劇「ラ・ボエーム」ミミの唄 (プッチーニ作)
ワイティング鈴木
- 七、歌劇「椿姫」あゝそは彼の人か (ヴェルディ作)
寺脇さわ子

- 八、歌劇「アイーダ」勝ちてかへれ (ヴェルディ作)
船越富美子
- 九、歌劇「ラ・トラヴィアタ」花より花へ (ヴェルディ作)
大矢ふみ子
- 十、「アイ・アイ・アイ」(オスマン・ベレッツ作)
後藤花子
- 十一、歌劇「ラ・ジヨコンダ」自殺 (ポンチエリー作)
遠藤蘆瀬子

第二部

- 一、マンドリン獨奏 (特別出演) 田中常彦
小夜曲「月に寄せて」(サルコリー作) (無伴奏)
- 二、歌劇「オテロ」(イ) 柳の歌 (ロ) アヴェ・マリア (ヴェルディ作) 小原威子
- 三、歌劇「パリアツチ」鳥の歌 (レオンカヴァルロ作)
徳永晴子
- 四、歌劇「デイノラ」影の歌 (マイエンベエル作)
長島徳子
- 五、A「夢遊病者」(ベリーニ作)
B「空想」(ホーレ作) 山田兼雄
- 六、歌劇「ミニオン」のボロネーズ (トーマス作)
阿南忍
- 七、歌劇「カルメン」ミカエラの歌 (ビゼー作)
石井靖子
- 八、歌劇「ブリターニ」清教徒より (ヴェリーニ作)
井上けいこ
- 九、A「四月」(トステイ作)
B「マノンレスコー」(プッチーニ作) 三上孝子

第三部 特別出演

- 一、「海の組曲」(アマデイ作) 慶應義塾マンドリン倶楽部、指揮 服部正
- 二、歌劇「トスカ」愛と歌 (プッチーニ作) 佐藤千夜子
- 三、歌劇「マノン」夢の唱 (マスナー作) 渡邊光
- 四、A 歌劇「ルチア」狂亂 (ドニゼッティ作)
B 「別れの曲」(シヨパン作) 關屋敏子
- 五、A 「さらば」(トステイ作)
B 「ニーナの死」(ベルゴレスイ作) 奥田良三
- 六、歌劇「ルイザ」(シヤーパーンティエル作) 原信子
- 七、歌劇「マダムバタフライ」Aいとしき我が子よ、
B或る晴れた日 (プッチーニ作) 三浦環
伴奏 エンリコ・ローシー 灰田友紀子 林良夫
カスリー・ワイテング 多部三郎 宇佐・ダリオ
富崎富子

作曲家にはヴェルディ (Giuseppe Verdi, 1813-1901)、プッチーニ (Giacomo Puccini, 1858-1924)、トステイ (Francesco Paolo Tosti, 1846-1916)、ベッリーニ

(Vincenzo Bellini, 1801-1835) の名前が並び、歌われた曲の多くがイタリアオペラの aria である。いずれも大曲であり、プログラムからイタリアオペラに対する弟子たちの熱意を感じる。歌った弟子たちは、服部都代子、鈴木萬恵子、菊池恭子、鈴木敏子、神保悦子、ワイティング鈴子、寺脇さわ子、船越富美子、大矢ふみ子、後藤花子、遠藤衛邇子、小原威子、徳永晴子、長島徳子、山田兼雄、阿南忍、石井靖子、井上けいこ、三上孝子、佐藤千夜子(1897-1968)、渡邊光、關屋敏子(1904-1941)、奥田良三(1903-1993)、原信子、三浦環で、歌唱の他にも慶應マンドリン倶楽部の演奏や第二部の頭に田中常彦(1890-1975)によるサルコリ作曲の〈月に寄せて〉のマンドリン独奏が行われた。



(写真2)「追悼演奏会の写真」(サルコリの彫像を挟んで、左が三浦環、右が長島徳子。花には「サルコリー先生の霊に捧ぐ」の文字が見える。提供：丸山洋子氏)

演奏会は3部構成で閉会は10時過ぎであったという。会の収入はサルコリの墓碑の建設費に充てられ、追悼演奏会の記事は5月5日付の『読売新聞』²³⁾や『東京朝日新聞』²²⁾にも取り上げられた。

1-6 『少女の友』『婦人画報』

追悼したのは弟子たちや音楽関係者だけではなく、雑誌『婦人画報』の5月号には、3頁にわたる追憶記事、そして『少女の友』7月号には、9頁にわたってサルコリにまつわる「読み物」が掲載された。

『婦人画報』は「サルコリー翁が晩年我娘の様に可愛がり、小学校から女学校へと世話し、歌の勉強をさせてみた」長島徳子のサルコリに向けた追憶記事である。記事によると「初めて私(長島徳子)がサルコリー先生にお会いしたのは、七歳頃でした。その頃から叔母さ

んが先生の所の女中をしてゐたものですから何時とはなしに遊びにいつたのが初まり」だという。「(長島は一度両親の元に帰ったが、再び両親にサルコリのところに戻る許可をもらってから)毎日は、先生のわがまゝな娘であり、秘書であり、お弟子でもある幸福な日が續いてゐたのです(…)それがこんなに早く中断される日がこようとは夢にも思はず」と、サルコリが病に倒れてから、亡くなるまでのサルコリの状態やサルコリに対する心情が書き綴られている²³⁾(長島徳子 1936:124-126)。

『少女の友』のタイトルは「楽人の死」で、日本に来てから死去するまでのサルコリととく子(長島徳子)の物語が書かれている。サルコリが幼いとく子にピアノを指導する場面や、サルコリがとく子の帰りが遅いことに心配する場面など、サルコリの日本での日常が少女向けの視点で描き出されている²⁴⁾(黒百合子 1936:74-82)。

これまでの新聞や音楽雑誌とは違い、『婦人画報』も『少女の友』も、父親と娘のようなサルコリと長島徳子の日々のやりとりを中心に、サルコリの人間的な側面が綴られている。

2 サルコリ顕彰

2-1 四谷の自宅とサルコリの面影

5月16日付の『報知新聞』に、サルコリが住んでいた家に関する記事が掲載された。「故サルコリー翁の家取り壊しの悲運 ハーンの家家のやうにと明星らが保存運動」の見出しに「聲楽のメツカ」という副題が添えられている。

「裏日本の湖都松江市には、異境の文豪ラフカディオ・ハーンの家が今もなほそのまゝ保存されて、ハーンありし日のおもかげを傳へてゐるが、楽壇のハーンにも比すべきア・サルコリー翁が二十年の長きにわたって住みなれ三浦環、關屋敏子両女史を初め百數十名の聲楽界の明星を次々に送り出したゆかりの家が、今家主の命令で取りこはしの運命にあひ、サルコリー門下シエナ會の歌姫達が『声楽のメツカをままれ』と対策を考えてゐる」²⁵⁾(『報知



(写真3)「故サルコリー翁の家取り壊しの悲運」(「追悼演奏会」の写真と同じ「サルコリー先生の霊に捧ぐ」の幕が見られる)

新聞』1936.5.16, 7面)

美術界からもサルコリの功績を顕彰しようとした人物がいた。彫刻家の和田嘉兵治と、早川魏一郎である。いずれも、新聞に記事が掲載された。

和田は「彫刻家和田氏は美校を出ると直ぐイタリーに渡つて七年間、サルコリ翁の生れたシエナにあつて彫刻を学んだ人サルコリ翁に面識は無いが、シエナに生まれた藝術家と聞いて勃然と起つた制作欲に、翁の浮彫に手を染めることを決心し、生前の寫眞を集めては粘土をこね始めてみた矢先イタリー大使館から和田氏を訪ねて彫刻依頼の申出があつた⁶⁹⁾」という(『東京朝日新聞』1936年4月14日付夕刊)。『東京朝日新聞』に掲載された写真には、演奏会で披露されたものと同じ彫刻が見られる。

早川は「気鋭の彫刻家すでに他の委嘱でサ氏の彫刻を作つてゐる人もありぜひ製作を引き受けたいという数人の彫刻家のうちから『音楽に理解をもち先生のもつあの静けさを眞に生かせる人を…』と『シエナ會』から特に人選を任された有馬生馬氏推薦で製作を引受けたものである(…)見事な出来栄であるこの彫刻を嵌めこむ花崗岩は有馬生馬氏邸にある高さ六尺餘の自然石で浮彫の下にはブロンズで『声樂家アドルフォ・サルコリーこゝに眠る』との文字が刻まれる」という⁷⁰⁾(『読売新聞』1936.10.13, 7面)。

おわりに

本稿は1936年4月以降に書かれたサルコリに関する報道記事、弟子たちの追悼・トリビュートを中心に調査した結果を報告した。資料の調査によって、サルコリは死去後も新聞や雑誌に取り上げられていたこと、そしてその掲載先も『婦人画報』や『少女の友』など、音楽愛好者以外の読者層を持つ雑誌にも広がっていたことから、サルコリは死去後も当時の日本国民の関心を集めていたことを明らかにした。

1936年は、人気のあるオペラ草分けの三浦環や原信子が中心になって、サルコリに学んだ多くの弟子たちがサルコリの遺徳を偲んで追悼演奏会を行ったほか、家の保存運動がおこったり美術界からもサルコリの彫像を作る人物があらわれたりするなど、サルコリの偉業を称える動きが多くみ

られた。「廣く日本の歌手で先生の御世話になつた人はどんな數に上るでせう」という三浦環の言葉にも表れている通り、1936年の記事は当時の日本の歌手たちにとってサルコリの影響が大きかったことを物語っていた。

このように純真な気持ちでサルコリを顕彰する若い芸術家たちがいる一方、「同氏の葬儀に樂壇人の出席者の少なかつた」という言葉からは日本の樂壇がサルコリに向けていた冷ややかな見方も伝わる。この問題について伊庭孝は、これまでと違った見解を示した。これまでは、例えば弟子である関屋敏子が東京音楽学校を退学した問題が、サルコリの「イタリア派」対東京音楽学校の「ドイツ派」につなげ、「イタリア」と「ドイツ」という二項対立の中で捉えられていたが、伊庭は、オペラ歌手ではあつたもののイタリアで正式な音楽教育を受けていたかどうかを明確に示すことのできなかつたサルコリに対して、音楽対する素地、つまり、伊庭の言葉を借りるならばサルコリは「ペダゴグとしての教養を持つた人」ではなかつたことがサルコリが日本音楽界で不利であつた理由なのではないかと推測している。

とはいえ伊庭も「サルコリ氏は恵まれなかつたが、其の間、日本在住のたつた一人のベルカント歌手及び教師「サルコリ氏のシステムは完全無缺のものではないだらうが、然し氏一人の陰然たる存在が、今日どれだけの力となつてゐるかを思ふ」と日本音楽界におけるサルコリの功績を称えて言葉を結んでいる。

本研究が対象とした1936年4月以降に書かれた記事からは、それまで日本で聴くことが出来なかつた声の持ち主であり、日本にベル・カント唱法をはじめて伝え、自宅で弟子を教え続けたサルコリに対して感謝の意を表し遺徳を偲ぶ姿が見られる一方、サルコリを冷ややかにみていた当時の日本音楽界の様子も伝わり、この時代、サルコリに対する評価が交錯していたことが浮かび上がる。

(付記) なお、『金沢星稜大学人間科学研究』(第13巻第2号)では、サルコリの没年を68歳としたが、サルコリは誕生日を迎えてから死去したため、没年を69歳と訂正します。

引用文献

- (1) 直江学美 2020「アドルフォ・サルコリの音楽活動に関する研究(7)」、『金沢星稜大学人間科学研究』第13巻第2号、33-38頁。
- (2) 三浦環 1936「『お蝶夫人』の生みの親 サ氏の危篤を聞いて駆けつける 三浦環夫人は自動車中にて語る」。(掲載紙、掲載年月不明)
- (3) 『読売新聞』1936「サ翁 追悼音樂會に前奏不協和音 両歌姫が出演中止」。4月1日付、2面。
- (4) 『読売新聞』1936「追悼音樂會のもつれ解消」。4月8日付、7面。
- (5) 原信子 1936「サルコリー先生を憶ふ」。『明朗』(信正社)1936年5月号、102-104頁。

- (6) 丸山洋子 2020 インタビュー。
- (7) 原信子 1952 「サルコリ翁を憶う」。『サルコリー先生追悼音楽會プログラム』（サルコリー先生追悼音楽會委員会），6-7頁。
- (8) 原信子 1936 「逝けるサルコリー先生」。『音楽世界』（音楽世界社）第8巻4号，（ページ不明）
- (9) 『読売新聞』1925 「旧友の思い遣りで晴れの独唱会」。5月25日付，7面。
- (10) 安芸太郎 1927 「關屋敏子嬢」。『音楽を志す女性へ』（章華社）108-111頁。
- (11) 伊庭孝 1936 「サルコリ氏の功績に就て」。『音楽世界』（音楽世界社），第8巻4号，51-55頁。
- (12) アドルフォ・サルコリ 1936 「日本と伊太利音楽」。『音楽月報』（音楽月報社）1936年5月号，8頁。
- (13) 太田勤之 1936 「私楽派の人サルコリー」。『音楽月報』（音楽月報社）1936年5月号，8-9頁。
- (14) 下位英一 1936 「サルコリさんを偲ぶ」。『音楽月報』（音楽月報社）1936年5月号，9頁。
- (15) 井上けい子 1936 「サルコリー先生」。『音楽月報』（音楽月報社）1936年5月号，8頁。
- (16) 『東京朝日新聞』1936 「赤外線—サルコリ翁の死—」。3月16日付9面。
- (17) 『音楽月報』1936 「編集後記」。『音楽月報』（音楽月報社）1936年5月号，ページ番号記載なし。
- (18) 『読売新聞』1936 「銀色のヴェールに悲愁をこめて サ翁追悼音楽會の總練習」。5月1日付，7面。
- (19) 『時事写真新報』1936 「涙のアヴェ・マリア」。5月2日付。
- (20) 『読売新聞』1936 「涙で唄ふ アヴェ・マリア サルコリー翁追悼音楽會」。5月5日付，7面。
- (21) プログラム 1936 「故ア・サルコリー先生謝恩大演奏会」。（シエナ會）1936年5月4日。
- (22) 『東京朝日新聞』1936 「ニュース縮刷版」。5月5日付11面。
- (23) 長島徳子 1936 「サルコリー先生を憶ふ」。『婦人画報』（東京社）1936年5月号，124-126頁。
- (24) 黒百合子 1936 「楽人の死」。『少女の友』（実業之日本社）第29巻第7号，74-82頁。
- (25) 『報知新聞』1936 「故サルコリー翁の家取り壊しの悲運 ハーンの棲家のやうにと明星らが保存運動」。5月16日付7面。
- (26) 『東京朝日新聞』1936 「日本の歌の父 サルコリ翁の横顔」。4月14日付夕刊。
- (27) 『読売新聞』1936 「宛ら生けるやう浮彫“聲樂の父”」。10月13日付7面。